

○8月3日から4日にかけて行われた東大見学会、企業大学訪問。二日間とも、とても有意義な時間を過ごすことができましたし、私が想像していた以上に多くのものを得ることができたと思います。

○3日の午前中に行われた笹川平和財団、日本財団、ディレクトフォース共催の夏季プログラム「世界を視野に自らを生かす」では普段関わることの無いような方々から大変貴重なお話を伺うことができました。笹川平和財団理事長で前国際エネルギー機関事務局長でもある田中伸男様の基調講演は、国際機関について理解を深め、イメージを持つことができた大変面白いものでした。講演を通して、エネルギーの番犬とも呼ばれるIEAは消費者の立場に立って市場を冷やすことをして、お金を儲けたいOPECとは相対する立場として活動をしているということが分かりました。また、お話の中で特に印象的だったのは「福島原子力発電所の事故で東日本で電力が足りなくなっていた時に、電力が余っていた西日本から電力をたくさん持ってくることはできなかったのは、東日本と西日本で系統網の周波数の統一がなされていなかったからだ。その系統網の周波数統一をIEAは日本政府にするように言っていたのに日本政府はやらなかった。」という話でした。この話から私は国内における政治的な損得や利害を超えた忠告、提案ができる国際機関は今後ますます大切になっていくのではないかと考えました。以前、国際機関といったものに対して、意見を言うことしかできない、実行力がないという批判を聞いたことがあるのですが、実はその意見を言うということこそが重要で、この先が不透明な世界を明るくする重要なものなのではないのかと思いました。その後、各講師の先生方からそれぞれの分野のお話をお聞きしました。それぞれ流通支援活動や海洋学など様々なご専門の講師の方々に、専門の内容を主にお話いただきましたが、やはり最後には「こういう力を身につけてほしい」「こういう生き方をしてほしい」という人生観に関わるお話があって、深く共感し、とても心に残りました。今後、自分の教訓として心にとめておきたいと思います。

○3日の午後は企業訪問ということで私たちは新潮社を訪れました。主に伊藤取締役からお話を伺いました。まず、新潮社の基本的な考えとしては、この世の中で活字離れが進むのは本の面白さを知らない人が多いからだというものだそうです。そして本の面白さを知らない人に興味を持ってもらうために宣伝に力を入れているそうです。その宣伝の例として、伊藤取締役は二つお話ししてくださいました。一つは1976年から始まった「新潮文庫の100冊」という企画。これは、なかなか本に馴染みにくい人にも本を読むきっかけとなって欲しいという思いで始められたそうです。もう一つは最近のもので、キュンタというキャラクターが本を通して人間の感情を知っていくという企画です。このように、工夫された企画を考えるのは、良い本を本屋に並べておけば売れる時代は終わって、どれだけ良い本なのかということをお伝えしないと本が売れない時代なのだからだそうです。その中で意識していることは「読者目線」。一般によく知られている芸能人に感想を書いてもらったり、読者に分かりやすいキャッチコピーを考えたり様々な工夫をなさっているとのことでした。ここまでのお話を聞いて、私は大きく二つのことを考えました。一つ目は、私が興味のあるこの分野の知らなかった一面を知ったということです。本を作る、文章を見直すだけでなく、買ってもらうためにアピールすることが一番大切なのだというのは驚きでした。

二つ目は、「なぜ働くか」ということです。これは今回の企業訪問を通して私が考えたいと思っていたことでした。企業はお金を稼ぐために活動をするということは疑いようのない事実で、これまでの伊藤取締役の話の中には「宣伝」や「読者目線」といったキーワードが登場しましたが、それらはすべて乱暴に言ってしまえば、お金儲けのためと言うことが出来ます。新潮社は他社との競争に勝って自社が生き残れるように様々な工夫をしたということです。ただ、世の中には「やりがい」が大切だという人もいて、お金を稼ぐことが大切なんじゃないのかという私の考えとは違うものでした。伊藤取締役の話聞いてやっぱりお金儲けのためではないか、と私は心の中で思っていたのです。しかし、ここからお話がやりがいや辛いことといった感情の面に移るに連れて、私の考え方が変わることになります。「宣伝」についてのお話の次に、編集者という仕事のやりがいをお聞きすると、作家が書いた本を一番最初に読むことができる「ファーストリーダー」になれることを挙げていらっしゃいました。まだこの世の中でこの原稿は誰も読んでいないんだという不思議な気持ちは編集者ならではのもので、そんな喜びや嬉しさが大きな励みとなっているそうです。また、「時代の風」をつかんで本を作ったり、自分が「時代の風」を生み出すような感覚を味わうことができるというのも大きなやりがいだそうです。辛いと感じるのは、作家と会社の考えに微妙なズレが生じて、板挟みになってしまったときだそうです。そういうときには耐久力が必要で、自分は一生懸命やれるだけやって、あとは仲間が助けてくれると信じて耐えるそうです。また、「慎重な楽観主義」という言葉もおっしゃっていました。悲観的になってしまっただけではないですが、かといって物事を楽観して雑になってしまっただけではないということだと思います。伊藤取締役の話の要旨はこういったことでしたが、編集者としてのやりがいや面白さを語る伊藤取締役の顔は生き生きしていらっしゃいましたし、確かにそこには「やりがい」が存在していると感じました。企業はお金を稼がなければならず、それが何よりの優先事項ではありますが、その中でやりがいを見つけていくことが大切なのではないかと思います。これが「なぜ働くか」という問いに対する今回の私の一つの答えです。また、お話を通して私が興味、関心がある「記者、編集者」という仕事により一層の魅力を感じるようになりました。今から「これに必ずなる」と決めておく必要は必ずしもないと思いますが、自分の将来の姿についてイメージを膨らませることができたという点でも、本当に貴重な体験をさせていただいたと、新潮社の方々に感謝をしています。

○3 日夜の二高 OB、OG による懇談会は、主に東大に通う先輩方から、現場のリアルな話を聞くことが出来ました。東大について知らなかったことをたくさん知ることが出来ましたし、具体的なアドバイスは今後の勉強の参考にできると思います。そして、実際に会って話を聞いたからこそ分かる雰囲気や臨場感を感じました。

○4 日の東大のオープンキャンパスでは今まで漠然としていた東大のイメージをより鮮明なものに変えることが出来ました。複数の学部の様子を見学したり、講義に参加したりしたことで、実際に行ったから分かるものを肌で感じる事が出来たのは大きな収穫だと言えます。

○2 日間という短い時間でたくさんの体験をすることが出来ました。お世話になった多くの人に感謝をしたいと思います。そして、2 日間の体験を通して考えたことをこれからも活かしていければと思います。